

第5回 文化会館整備検討委員会議事録（概要）

日時：平成23年10月4日（火）

13時30分

場所：アートフォーラム大会議室

〔出席者〕 高谷時彦委員 樋渡美智子委員 佐藤進委員 奥井厚委員 山田登委員
前田勝委員 菅原一浩委員 小林功委員 渡部巖委員 大久保紀子委員
柿崎泰裕委員 齋藤瑞穂委員 三浦譲委員 村山智昭委員 石田雄氏（山崎
委員代理）

教育長 社会教育課長 文化主幹 建設課長

芸術文化主査 芸術文化係長 佐藤総合計画

1. 開 会（主幹）
2. あいさつ（委員長）
3. 報告事項（主査）

施設の概要の方向性について文書で提出された意見のまとめ、文化会館技術職員
意見聴取について資料No.3と4により報告

4. 議 事

主 査：基本理念、整備基本方針、目指す施設の方向性について資料No.1により
説明

委員長：基本理念、整備基本方針、目指す施設の方向性について説明があった。最
初に基本理念に限ってご発言をお願いしたい。前回までは文章が長い、三
行くらいにまとめることができないのかというご発言があったので、短く
した文章も提示されているが、説明の中でも短くすることによって大事な
言葉が抜けてしまうということもあるかもしれないので、そこも含めて丁
寧にみていただきたい。それから端的に力強くわかるようにするにはスロ
ーガンが必要なのではないかとということで、スローガン（素案）が掲げら
れているので、お気づきの点があれば。

委 員：短くした文章の「中核施設」と「殿堂」という言葉はどういう意味で使われ
ているのか。

主 査：中核施設ということなので「中心的な」という意味。「殿堂」は長い歴史の

中での重点的なものというふうになると思う。

委員：基本理念を短くということだが、長い文章の方が文化会館を作る市民の思いが詰まっている感じがする。短くした文章では今までの長い伝統とかそういうものが足りない感じがする。長い文章のほかに、短いスローガンがあればよろしいのではないか。

委員：基本理念は自分たちがどういうものを作りたいかということなので、別に短くする理由はなく、わかりやすい長い方の文章でよろしいのではないか。スローガンについては、高める、育てるというのはわかるが、「支える」というと、誰が支えるのか、意味合いがわかりにくいと思う。

委員：芸術文化ホールが今までの活動を今まで以上に支えてほしいし、高めてほしい、育ててほしいという意味である。我々は「芸術文化の創造」についてではなくどういうホールを作るかを話し合っているのであり、「ホール」ということが入っていないとわかりにくい。

委員：基本方針は、1は発表の場を提供、2は鑑賞の場を提供、3は練習、教育の場を提供、4が交流の場を提供と要約できると思うが、これが基本理念、スローガンにどう生かされているのか。支えるが発表の場、高めるが鑑賞の場、そして育てるが練習の場ということになると思うが、「交流の場」がスローガンにないのが気になる。それから文化芸術の殿堂という言葉は、難しくてわかりにくいので、もっと簡単な言葉にしていきたい。基本理念に「未来を担う子どもたちを育む中核施設」とあるが、教育はもちろん大きな主眼ではあるがもっと幅広い市民が使っているわけなので、「育む」という部分さえあれば、未来を担う子どもたちのため、という言葉は必要ないのではないか。基本理念は、常にここに立ち返りながらホールが運営されていくことになるものであり、運営ということを考えると、教育の比重が大きすぎるのではないか。「育む」という点はいいが、子どもばかりでなく、年を取っても育まれなければならない。

委員：理念は、できるだけ短く、わかりやすくすべき。前回までの文の前段は、鶴岡の芸術文化が歩んできた経過を書いているが、理念はそれを踏まえて、その先のことを述べるのでよいのではないか。それから「殿堂」については、ここでは音楽の殿堂、学問の伝統という意味のことを言っているので、ここはやはり重くなければならないと思う。何億もかかる建物を建てるわけなので、もっと言葉の選択を慎重にするべきである。

- 委員：このスローガンは大変端的で明快で忘れない、誰でも覚えられる言葉だと思う。「支える」という言葉、非常にいいと思う。今私たちの生活に必要なものは、他とのつながりである。これからの過疎化、高齢化、少子化の中で自分の好きなことをするだけでなく、他の人たちとの交流を通してまた違う自分を見つける、そういうことが必要であり、これから考えるべきひとつの方向性なのではないか。基本方針の4番に交流の拠点とあるので、スローガンにも交流するという言葉を加えたいが、語呂がよくない。
- 委員：文章化してアピールするには、平明で簡潔、そして要点要領を得た文章が重要だと思う。難しいことを抽象的に高邁に述べても一般の人に通じない。基本理念の長い方の文章の前段「大きな力となっている」というのは、過去と現在がつながっている一般的な表現である。その次の「文化会館は」というのはより具体的な表現。具体的な表現というのは平明で、一般にアピールする現実的なこと。そう考えると、短くした文章は、なかなか要点を得ている。ただし「殿堂」は、「舞台芸術の殿堂」と表現しないと、舞台芸術だけでなく、展示芸術もあるのに、文化会館が芸術文化全体の中心ととられてしまう。そういう文章化を工夫してはどうか。
- 委員：短くした文章には今まで議論してきた要点がすべて盛り込まれているのではないか。初めての人がぱっと見たときにわかりにくいかもしれないという心配もあるが、その次の基本方針で具体的にその部分をひとつひとつあらわしているのだから、これでいいのではないか。また、殿堂と言う言葉は、施設という物的なものから精神も含めた広い重い言葉で、良いと思う。スローガンについては、「支える、高める、育てる」の順番は、「支える、育てる、高める」ではないかと個人的に思う。それから四番の交流の部分については、確かに入れるとスローガンとして長くなったり覚えにくくなったりするかもしれないが、支える、育てる、高める、「広げる」という言葉で表現してはどうか。
- 委員：短くした文章の中に、整備の基本方針の1～4の言葉が入っているが、それをわかりやすくするためには、文化会館は市民の多様な文化活動を支える場所、同じく芸術文化性を高める場所、未来を担う子どもたちを含め人を育む場所、市民がつどい交流する場所という四つの目的を簡条書きにするとわかりやすいのではないか。そしてスローガンに「交流する」という意味の言葉を入れるならば、「つながる」という言葉はどうか。基本方針の

1～4それぞれに意味があるので、それを頭につければその後の説明もさらにわかりやすいのではないかと思うし、長い方の文章の前段には過去から今までのいろいろな思いが詰まっているという発言もあったが、説明の文章を少し入れることもできるのではないか。誰が見てもわかりやすい文章の方が、市民が共感を持てて、自分もここで何かしようと思しやすい。殿堂という言葉は重みがあるが、逆にハードルが高すぎて行きにくいように捉えられてはもったいない。文化会館は芸術性の高い、本物が見られる素敵な場所でもあってほしいが、市民としては誰もが行きやすく利用しやすい場所であるほうが大切だと思うので、殿堂よりわかりやすい言葉がよい。

委員：短い文章の方はけっこうまとまっていると思うが、わかりにくいところ、誤解を受けるところもある。箇条書きにするというのもひとつの手だが、この文章でわかりやすくするならば、わかりにくいところを直せばいいのではないか。「市民の多様な文化活動を支え」、その後「芸術文化性を高め」となっているのでわかりにくいのであり、これを仮に後ろのほうにもっていけば、「舞台芸術を中心とした市民の多様な芸術文化活動を支え、未来を担う子どもたちを育てる中核施設」となるので、子どもたちからご年配の方まで誰でもという意味がちゃんと伝わるのではないかと思う。市民が集い、交流する、未来につなぐという後に「芸術・文化性を高め」を入れれば、「殿堂」と「芸術文化性を高める」というのがつながる言葉になって、わかりやすい文章になるのではないか。

委員：「つながる」もいいと思うが、スローガンも短くした文章も主語は「文化会館」であり、文化会館は支える、文化会館は高める、文化会館は育てる、そうすると文化会館はつながる、ではなくてつなげる、となる。「文化会館建設」が先にある、「市民の芸術性を高める」のは次の問題だと考えていた。それから殿堂という言葉に対してはいい点と悪い点があって、殿堂というと非常に立派なものにしなければというイメージにとらわれて、機能的な面から考えたときに、言葉が重々しくなりすぎないか気になる一方で、殿堂に近い言葉のイメージでいうと、施設は文化のシンボルととらえられてきた部分があるので、自分の中で賛否両論ある。

委員：「支える、高める、育てる芸術文化の創造」というスローガンは内容としてはいいが、若い方に向けては硬すぎる、難しいと感じた。いろんな世代の

人たちが市民参加していく施設として、市民参加の第一歩として市民から公募してもいいのではないか。

委員：文化会館が運営というものにも強い意識を持っていることをスローガンや基本理念でもイメージできるものにするべきではないか。そういう意味でつなげるとか交流というものと結びつける表現を盛り込んでいただきたい。

委員：殿堂とか中核という言葉をやわらかい表現に変えた方がわかりやすく、なじみやすいと感じた。

委員長：スローガンについては、これからできる文化会館が主語になっているのではないか、その文化会館が文化の創造を目指すということになると思うが、その中でのキーワードとして「支える、高める、育てる」という三つの言葉があり、交流とつなげるとか、そういうことも大事にするとすれば、もうひとつ言葉が入ってもいいのではないかというご意見もあった。ただ言葉が多くなるとまぎらわしくなるということもあるので、何を重点的に取り上げて言いやすいフレーズにしていくかということが課題になっているのではないか。それから殿堂や中核という難しい言葉については、それに対する年代的な言葉に対する感覚というのものもあるのではないかと思うが、これから市民のみなさんに見てもらう文章なので、若い人たちにも共感できるような言葉を選択していく必要があるのではないかと。そこをどうしたらいいか。それから、短くすることによって説明的なことがカットされるので、初めて読んだ人はちょっとわかりにくいと。ただここで議論していくなかでは新しい文化会館を建設するということで現代を起点にして未来の方向性を明確に出すということで過去のことは省いてもいいのではないかと、という意見もあった。そこはどうしたらいいか。

委員：なかなか前に進まないの、各自作文して提出して、それをまとめていただいて、次回多数決で決めるという形はいかがか。

委員：逆に一人ずつが考え出すとちょっと膨らんで、まとめるほうとしてはもっと大変なのではないか。今日の話を事務局でまとめてまた出していただいて、今年度の終わりくらいまでにまとまればいいのでは。ただコンセプトで大事なことは、文化会館は、支えるという活動は市民活動の発表の場、高めるという活動は内外の演奏家が来たりすること、育てる活動はいろんな学校関係者が使っていること、つながるということは各地の交流の芸術や舞踊があったり、いろんな団体が集まって合同発表したりと、そういうこと

が館として運営していくにあたりどう全体でバランスをとって網羅していくかということになる。この会館ができたときにその機能を果たしているかどうか問われていくということを考えれば、運営のことも含め、およそのスローガンというのが見えてくるのでは。あまりスローガンに運営がどうあるべきとかいうことを書きすぎると、震災がおこってホール機能をなさなくなった、その中でホールはどうあるべきか、本当に必要なのかということも問われている中ではそれが足かせとなってしまうので、細かくしすぎないほうがいい。

委員：スローガンの「支える」というのは「育てる・高める」に意味合いとしてすでに入っているので、「育てる、高める、つなげる」だけでも十分ではないかと、ひとつの考え方として提案する。

委員：「支える」にこだわるのは、現文化会館は、施設が充足していない中でもみなさんが一生懸命切磋琢磨して工夫してやってきたので、今頑張っている人たちのことは絶対忘れてはいけないと思うからである。

委員：こればかりやっていると進まないの、まとめていただいて次に提案していただければいいのではないか。

課長：長い方の文章と短くした文章どちらがいいのか。育むのは子どもたちだけではないという意見をどうしたほうがいいのか。「殿堂」について意見が二つに分かれているがどうしたほうがいいのか。「支える」をはずしたほうがいいのか、「つなげる」という字句を入れたほうがいいのか、それから芸術文化の創造ではなく、ホールという言葉を入れたほうがいいのかどうか、これらについて意見が分かれているので、ある程度まとめていただきたい。

委員：基本方針について議論をしていないので理念がまとまらないのではないか。基本方針4つのうち、どれに重点をおきたいのか価値付けをしていけば、理念もおのずとはっきりしてくる。例えば殿堂という言葉を使うかどうかにしても、殿堂というと自然に大きな建物をイメージして、それは鑑賞機会を与えるということにつながるが、それをどう作るかということが決まっていない。だから殿堂を使うかどうか言葉の問題にも返ってきている。理念は少し置いて次に進んではどうか。先に理念を決めるのであれば全体を網羅した言葉を使えば良く、そういう意味ではまとまっているのではないかと思うが、もう少し深い理念にするのであればやっぱりきちっと次を議論してからでないと思わないのでは。

委員長 : 長い文章にするか短い文章にするかということは今すぐここで決めるのではなく、次に進んでから振り返って決めたいと思う。整備の基本方針、4項目あるが、これもスローガンと密接な関係がある。それぞれの項目にご意見を。

委員 : 三番の目指す施設の方向性から基本方針に戻ってはどうか。

委員長 : 整備基本方針と目指す施設の方向性を一緒にしてどうぞ。

委員 : 目指す施設の方向性の一番目、「音楽舞台芸術をはじめ、多様な市民の文化活動を支える施設」、一口に言うと、「音楽、舞台芸術のための、多目的ホールを目指す」ということでよろしいか。

委員 : 文化会館のホールと言う言葉が取り上げられているが、私たちはホールだけでなくリハーサル室等含め全体を考えている。それをあえて狭義に考えているのか。

委員 : 文化施設の中にはホール機能だけでなく多機能なものもあるので、ホール機能が中心だという意味でホールと言っている。舞台をホールということもあるけれども、全体の施設そのものをホールととらえていたので、そのイメージの違いである。

委員長 : そこまで話が発展すると、施設計画も関係してくる。

主査 : 施設計画について資料No.1により説明。

委員 : どうしても基本理念にも関わることで議論しておかなければいけないことが、多目的であるかどうかということだが、やはり鶴岡は多目的を目指すべきだろうと考える。音楽、演劇、講演会、コンベンションなどを幅広く実現させるホールでなければならない。それがあ程度はっきりした中で基本理念に盛り込まれていくのではないか。例えば奥州市のゼットホール(1500席)は、幅広い要望に答えている。奥州市は合併して人口13万人くらい、鶴岡と似ていて、近いところに盛岡、仙台があるというところだが、一般の市民からすればいろんなものを鑑賞したいということで、そこでは今のところ自主企画ではない企画でも、軽音楽で言えば、一青窈、山下達郎、ゆず、堂本剛等のメジャー歌手等が2、3ヶ月に一度は来て、それに関しては1500席あるために損はしていない。限られた土地の中で、スロープで一階ということにこだわる必要はなく、二階、三階があってもいいし、そしてオケピットを作るなら高くして、そこを中心にクラシックをするならばパリのオペラ座やサントリーホールのように、周りをオーケスト

ラで囲むようにして、反射板を後ろから持ってくるという考え方もある。土地が狭いから無理だということはないのではないか。我々の情熱、事務局の情熱があればいろんな形ができ、この町に特徴的なものが考えられる。柔軟な考え方で多目的ということが実現できると思う。

委員：三つのことを申し上げたい。文化会館の全体の整備で、限られた予算の中ではまずホールに重点を置くべきである。その順番を決めるべきではないか。第二点はリハーサル室とか練習室とか会議室の併用をできるものはしていく流れを作り、十分検討すべきではないかということ。それから面積のことは決められる段階でないとの説明だったが、8頁の施設規模は今の段階で数字を入れるべきではないか。いろんな議論の中で、あれもこれも必要だといって、最終的に足したら全然間に合わなかったということになるかもしれないので、ホールはどの程度、楽屋はどの程度、と後から直してもいいから入れていくべきではないか。それから細かいことでは、あらかじめ自然条件を考慮して入り口等を検討していかなければならないと考える。

佐藤総合：参考資料No.1について説明

主査：参考資料No.2と3について説明

委員長：参考資料として公立文化会館の舞台の大きさ、平均値、それから鶴岡市6地域芸術文化協会のアンケート調査の結果について説明があった。

委員：今回の資料にも「生の音の響きを重視し」とあり、前回の会議でも「生音重視で」と話が出されたが、生音でいくと、多目的に使うためには音響関係にお金がかかると聞いた。生音でいくのであれば、基本方針、施設の方向性というところにも、「なぜ生音か」ということがこないといけないと思うが。

委員：生音を重視するというのには一般的には楽器（バイオリンやピアノ）のコンサートを重視するという意味。そうするとホールというものは基本的にはワンルーム形式（プロセニウムがない形式）で、かつ壁や天井は音を反射する素材を使い、一番後ろの壁はエコーが出ないようにするために吸音で、ステージも客席も一体という形にする。そうするとプロセニウムがないということ、響きがありすぎて言葉の明瞭度が出ないということから演劇系では使えない。ただ今回は、演劇系、音楽系、両方に配慮して多目的に行くしかないと思う。だからここに生音の響きを重視するとあるのは、私の

解釈では生音を出したときに、きちっと響くように作ってくださいという意味だと思う。基本的に多目的にした以上、残響可変というのがどうしても必要になり、コンサート系を基準にすると硬い材料で作るので、演劇をするときには壁を回転したり、壁の素材を変えたりして柔らかいものに変えないといけない。それにものすごいお金とメンテナンス費用がかかる。いずれにしてもステージの形式がまったく違うので、それを可変するために相当大きな装置が必要になる。そのメンテナンス費用については覚悟するしかない。多目的でいく以上は可変の仕掛けがいるということは前提にしたほうがいい。

佐藤総合：音楽をやるには、生音にこだわるかどうかに関わらず、音響反射板は必要であり、メンテナンスコストはかかる。それから残響可変は、計算上、シミュレーション上は必要になることが多いために、何年か前のホールはかなりお金をかけて付けられていた。それが実際使われているかどうかという実績となると、(演劇では)反射板をはずした段階でかなり響きが落ちるので、残響可変を使うところまでいかないというのが実情のようだ。音楽の専門家は音に敏感だが、演劇の専門家は音に関してそこまでこだわらない方が多いのではないか。

委員：実態として可変装置というのは作っても実際には使われないということが多い。あとステージを増やして観客席を減らすというものも、客席をはずす手間などがあるため実際にはめんどろでなかなか使わない。

委員：以前一番お金がかかるのはそこだと聞いたことがあるので、建てる段階でも、ランニングコストにもお金がかかるというのが恐ろしい。実際多目的にしか使われないのに、音にこだわらなければいけないのか。

委員：いろんな議論の背景にお金の事があり、それを前提に議論しなければならない。

委員：合唱については生音はいらないのか？

委員：多少は明瞭度を要求されるが、響かないとだめなのは。

委員：今回「多目的は無目的」という言葉に惑わされた部分はなかったか。何かにこだわったホールができてほしいとは思ったが、希望ホールと同じとなると地域のバランスを考えたときに、音にこだわる方は響ホールを使うとか、こういうときは希望ホールを使うとか、すみわけと言うことも考えていかなければならないのでは。

委員長 : 生音を重視したときのコストの面がどうなのか。あまりかかるようなら考えていかなければならないということもあるかと思うが、ある程度音楽、舞台芸術をベースにしながらも講演といったものにも対応できる多目的ホールを目指すというのがおおかたの考え方かと思うが。

委員 : 音楽、舞台芸術は舞台がよく見えてほしい部分があり、最近のホールの傾向は舞台が下であって客席が高い。ところが講演会は話す方が偉いので、舞台より客席が上にあると見下ろす形になるために非常に敬遠される。そういう点ではなるべくスロープがなだらかで上にいかないほうが良く、中央公民館はそういうつくりになっているので、音楽的には非常に音が聞きにくい。そういう点でバランスの問題はあるとしても、舞台芸術中心ということはお客様が見やすく聞きやすい、演奏者も演奏しやすいというのがいいホールの特性である。残念ながらいいホールであっても、あまり響きすぎたり、または他の音がまったく聞こえず音が混ざり合わない、演奏者が非常に演奏しづらいホールもある。いろんな分野の人がある程度納得できる生音にしてほしい。高さというと舞台のステージの高さと、舞台と客席との関係での高さがある。二階席があると下のほうにデッド空間ができたり響きの残響が変わったりするので、二階席の下が悪かったり、二階席が高すぎて怖いとか遠すぎて演奏者の雰囲気伝わらないとか、そういうことがある。

委員 : 音以外の面で、見るということから言えば、逆に三階席からだとも舞台が近いような気がする。二階、三階だから怖いということはないと思う。講演会でも、客席が自分より高いからいやだという講演者はいるのだろうか。

委員 : 今の議論からいくと、多目的しかないと思う。その場合少なくとも反射板は可動にして、その費用は相当かかると思うが、それは仕方がないことと覚悟してみんなで支えるということ。多目的にしないとすればホールを機能別に分けていくことになるが、それはあの敷地の中ではできない。いろんな技術があって多少は調節できるので、音響可変をなるべく少なくするようにして。

佐藤総合 : これから作るホールなので、残響可変装置をつけないようなホールの設計の仕方は可能ではないかと思う。

委員 : それでも幅広い要望にある程度応えられると。

佐藤総合 : 「よい生音」を作り出すホールにすることは、天井の高さ、壁の傾き、内装

にどういふものを使うかなどで可能と考える。

委員：いろいろな音を出すだけでなく、多目的で使うという要求に対しては。

佐藤総合：可能である。

委員：現会館も多目的ホールとしては音が良いと言われるが、そのやり方で今の会館よりもいい音になるか。

建築課長：現文化会館は音響分析を全くしていないホールなので、実際どういう意味でいいというのか不明であるが、ここ10年くらいで一番違っているのは、コンピューターのシミュレーション技術が相当上がってきていて、実際に作ったものとシミュレーションしたものの差異がかなり狭くなってきているということ。一昔前だと十分の一くらいの模型を同じ材質で作って、マイクを入れてシミュレーションしていたが、今はコンピューターで出てくるので、かなり狭い幅で想定できると思う。オペラを想定した生音というのは音楽と演劇と両方なので、そういう意味での音ができると思うし、講演などの電気音響の方もいろいろ技術が発達しているので、今より悪くなるということはないと考える。

委員：反響板は作らなくてはならないけれど、可変はいらなくて、要するに響きはある程度短いけれども音の混ざり具合が良く入ってくるようにすれば良い。かつホールに適正なボリュームを取っていけば、気持ちのよいホールができるはず。響きを長くすると他のものと共存するのは難しく、可変装置は絶対必要になる。

委員：響かない、デッドな環境はだめだが、響きを長くするのか、初期反射音の混ざり具合を良くするのか、そこはそのホールの質の問題で、いくつか考え方があがる。

委員長：最初の基本理念の文章、長い方と短い方があるが、どちらの方を重点にして取り上げるか。短い方を生かしていくことでよろしいか。短い方でここは直してもらいたいというところはあるか。

委員：短い文章でいいと思う。中核的施設というところは、中心的施設に置き換えて、殿堂は生かしてもいいのではないか。スローガンでは合併して大鶴岡市になって、交流ということが大きなひとつの要素なので、中心に据えたいと思う。スローガンの中に交流するという文言を入れると、より多目的にも、市民参加にも通じるし、市民サイドの、オープンな自分たちの市民会館という姿になっていくと思う。

- 委員長 : 「支える、高める、育てる」この中でカットする言葉はないか。
- 委員 : 「高める、育てる」というのは精神的なもの。交流するというの具体的な人が動く姿を言っている。支えるというのは最初どうしてなのかなと思っただが、整備基本方針を読んでいくと理解できた。今は支えないとだめな時代なので、生かしたい。支えあう、交流しあう、市民がみんな助け合って仲良く盛り上がっていく、そういうイメージが広がっていく姿をスローガンにしたい。
- 委員 : 「支える」という言葉はすでに、「高める、育てる、つなげる」の中に含まれている。支えるは言葉が4つになると冗長になるので、「交流」か「つなげる」という言葉だけでもいい。支えるというとおこがましい感じがする。
- 委員 : 言葉としては三つくらいが妥当。削るとすれば「支える」だと思う。
- 委員 : 基本理念は長い方がよい。長い歴史や郷土愛、高い地域文化というのは、次の世代につなげていかなければならない大事なことだと思う。
- 委員 : 鶴岡がこれまでやってきたものを認めないという意味で言っているのではない。今高いレベルにあるということは、先人が苦勞してここまで築いてきたから今がある、それは間違いないことだが、理念と言うのは、過去現在を踏まえて、未来を表現するものではないか。やはり短いほうがわかりやすい。
- 主査 : 前文としてこれまでの歴史や活動を別の形で表現した後に、基本理念として短い文章で未来をあらわしてはいかがか。
- 委員 : 市民憲章の前文のように。
- 委員 : 前回提案された基本理念の方が良かったのでは。今回のものは新たに付け加えられた部分が冗長な感じがする。
- 委員 : 逆に付け加えた部分に前の説明の部分が全部入っているので、付け加えた部分だけにして、ここに郷土愛ということを入れて合体させて一文にして前文とすればどうか。
- 目指す施設の方向性は、設備運営の観点からと、演者の観点が2と3、観客側が4と5、環境、運営設備が6と7と8、9は運営のこととバランスよく配分されていていいと思う。4にトイレのことも入れたらいいというくらいで、後はとてもいい。
- 委員 : 長い文章がいいと思う。鶴岡市民の文化性が高いということをあらわしていかなければならない。そして短いスローガン、それでいい。

- 委員 : 短くしなくてもいいのではないか。前段部分をもう少し短くするとして、極端に三行くらいにする必要はない。
- 主査 : 「高め、育み、つなぐ」舞台芸術を支える(文化会館の創造)ではいかがか。
- 委員 : 「高め、育み、つなげる文化会館」でいいのではないか。
- 委員 : 今出ていることをまとめていただき、次回継続審議してはどうか。
- 委員 : 「支える」は使い勝手の悪い現会館で今まで苦勞してなんとか工夫してやってきた人たちの活動をもっと支えてもらいたいという気持ちの表現。そのためには、客席のキャパのために舞台が制限されるのではなく、舞台まわりをきちんとして、その残りのスペースでどれだけのキャパ、客席がとれるかを考えてほしい。発表者と聴衆のバランスからいうと、活動を推進してきたほうの要求をもっと重点的に考えてもらいたいということが「支える」の意味である。今「高める、育てる」はホールと関係なく全体的な文化的な部分の話しになっているが、どういうホールを作るかと言うときに、鶴岡市の芸術団体や芸術文化活動を長年やってきた人たちのことを考えてホール機能を高めてもらいたい。そこを伝えないと観点が変わってくる。
- 委員 : このままでは平行線だと思うので、次回までに意見をまとめていただいて、この次に結論を出すことでいいと思う。整備基本方針とか方向性もいろいろ出ているが、これも今までの議論をまとめて提案していただいたものなので、そこの基本線にそって次回からも議論したほうがいいのではないか。そうでないとどこまで話したか全然結論が出ないということになってしまう。今までの議論を大事にしながら深めていく方法がいい。例えば「生の音」のことも深めて話し合うのはよいが、また元に戻ってしまうのはいつまでも前に進まないなので、次回からよろしく願いしたい。
- 委員 : 芸術文化活動、舞台芸術、芸術・文化性という言葉が出ているわけだが、どう解釈して使い分けているのか。その意図するものをこの次までに示してほしい。
- 委員長 : 言葉ひとつひとつについても吟味をしながら議論をしたい。今日話し合ったことを、事務局のほうでまとめていただいて、議論を深めていきたい。前回の議事録については、ホームページに掲載してよろしいか。
- 委員 : 了承。
- 主査 : 次回の日程、10月31日月曜日、午後1時30分でもよろしいか。
- 委員 : 了承。

委員長　：これで会議を終了とする。

5. 閉　会

教育長挨拶